

令和3年度第2回千葉県体育学会オンラインシンポジウム

テーマ：東京2020大会を支えたボランティア活動を振り返り、千葉のボランティア推進を考える

日時：2021年12月4日（土）13時～14時半

【内容・演者】 司会（帝京平成大学 馬場宏輝）

1. 千葉県都市ボランティアの活動について
 - ・開催までの準備から大会期間中の活動について
（千葉県環境生活部県民生活・文化課県民活動推進班 仁平貴子氏）
2. 千葉県開催の大会ボランティアの活動について
 - ・車いすフェンシングボランティア育成について（馬場宏輝）
 - ・大会期間中の活動について
（植草学園大学 遠藤隆志氏、3年 吉原未紗さん）
3. 千葉のこれからのボランティア活動促進について
 - ・千葉県（仁平貴子氏）
 - ・千葉市（千葉市総合政策局オリンピック・パラリンピック調整課
峯岸勇氣氏）
 - ・大学の立場から（敬愛大学 藤森孝幸氏）

【馬場】本日は「東京2020大会を支えたボランティア活動を振り返り、千葉のボランティア推進を考える」というテーマでシンポジウムを設定させていただきました。余計な話をすると長くなるので、開催趣旨を読み上げます。

新型コロナの蔓延に翻弄された東京2020オリ・パラは、当初予定から1年延期となり、2021年7月から9月にかけて開催されました。オリ・パラ開催にあたっては、2018年9月から12月にかけて大会ボランティアの応募があり、オリエンテーションや面接、共通研修が実施されました。同様に都市ボランティアも各自治体で募集・研修が行われました。都市ボランティアは海外からの渡航が制限されたことにより、語学ボランティアの活躍する場がなくなり、ほとんどの競技会場が無観客となるなど、活動の場をさらに失ってしまいました。千葉県では2017年に策定した東京2020大会に向けたボランティア推進計画のもと、共生社会の実現や国際社会や地域社会で活躍する人材づくりに向けて、ボランティアの育成に取り組んできました。また、千葉市ではボランティアに参加したい人とボランティアを必要とする団体をつなぐことを目的に「チーム千葉ボランティアネットワーク」を2017年に開設し、大会前からボランティアのレガシーを意

識した取り組みを進めています。そこで東京 2020 大会を支えた都市ボランティア・大会ボランティアの活動を振り返り、千葉のこれからのボランティア推進について考えたいと思います。



今回のシンポジウムの内容と演者についてはお示ししたとおりです。では、早速、千葉県庁の仁平さんから話題提供をお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。

【仁平】 皆さんこんにちは。千葉県庁県民生活・文化課の仁平と申します。今日はお時間をいただきましてありがとうございます。千葉県の県民生活・文化課は、市民協働やボランティアの推進を日頃から業務として行っている部門です。こちらで千葉県内の都市ボランティアの事務局として企画運営を行っていたので、今日はその立場でお話をさせていただきます。4分程度ですが、2018年頃から今日に至るまでの都市ボランティアの研修や大会期間中のリモート活動のイメージムービーを作成しましたので、そちらをまずご覧いただければと思います。オンラインの関係で止まってしまうところがあるかも知れませんが、後ほど参考に URL も共有させていただきます（注1）。（動画視聴）

ありがとうございました。では引き続き、スライドによる説明をさせていただきます。私からは都市ボランティアを中心とした東京大会における活動、そして今後のボランティア促進に向けての視点をいくつか提供させていただければと思っています。

まず、都市ボランティアは東京大会において、競技開催地の各現場に立って、観光客や大会観戦のお客さまのおもてなしをするというご案内の活動が目的のボランティアでした。パンデミックの中で、ボランティア活動を行えるのかという議論がなされる中、都市ボランティア事務局は、どういったところで中心的な活動を展開していけばいいか、日々葛藤の中にありました。一部の自治体では、有観客の中、当初予定していたとおりの現場活動を行えたところもありましたが、千葉県内の都市ボランティアについては、いろいろ議論を重ねた結果、一部エリアにおいて現場活動に代わる「リモートボランティア」を中心に行いました。大会終了後の11月28日、県立の文化ホールで ARIGATO TOKYO 2020 フェスティバルというイベントを行ったのですが、皮肉なことに感染症が落ち着いて初めて都市ボランティアが同じウエアを着て、一堂に会することができた行事となりました。イベントに来たお客さまをおもてなしし、ご案内することが初めて実現できたのです。大会ボランティアに関してはこの後、詳しくご説明があると思いますので、私からはこの、都市ボランティア「City Cast」について説明して

いきます。

当初、全国でおよそ5万人の都市ボランティアが活動予定だったわけですが、実際どの程度の数が活動できたかは、各自治体で今整理をしている段階です。都市ボランティアは、県という単位で数えますと、全国で10の県域で募集・運営がされました。ただ、有観客、一部の学校観戦を含む観客に対する現場活動として実際にご案内の活動ができたのは、札幌、宮城、茨城、静岡に留まっています。その他の自治体では、基本的にはリモートや一部現場においてご案内活動以外の別の活動を実施した状況になっています。

千葉県内では合計3,000人の募集を行いました。7競技の行われた千葉会場が募集人数の一番多いエリアで、一宮のサーフィン会場周辺、日本の玄関口としての成田空港、成田市内、ホテル集積のある浦安という5つの活動エリアのうち、希望するエリアを選んでいただく形で募集を行いました。

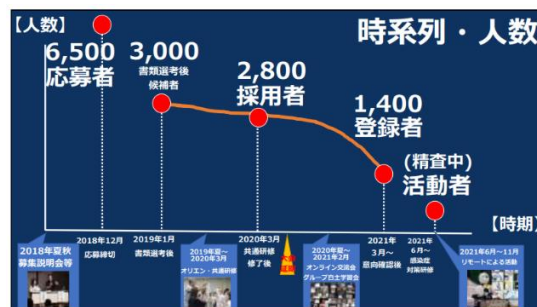


基本的には、各自治体が各エリアの運営を行う体制です。全県的に共通する事項の調整やユニフォームの手配、東京都や組織委員会、関連団体との横の連絡調整を私ども県事務局で行っていました。また、成田空港については千葉県の事務局が直接運営をしました。

後半で詳しく説明しますが、2017年12月に県でもパブリックコメントをかけて、「東京2020大会に向けたボランティア推進方針」を作りました。2017年から今日に至るまで、この方針に基づいて、ボランティアの育成や実践、レガシーをどう作っていくかを考え、活動してきました。2021年の実際の現場活動においてはリモートによる活動が中心になってしまいましたが、これら一連の取り組みで一番大事なことは、大会期間中の活動だけがどうだったかだけではなく、これまで数年間にわたりボランティアを育成してきたプロセス自体が重要だと私たちは考えています。活動人数を時間軸で見えていくと、ニュースでもご覧になったとおり、いろいろな事象がおきましたので、残念ながら、そのタイミングごとに登録人数は減っていきました。ただ、注目いただきたいのは、募集段階では3,000の枠に対して6,500の応募があったことです。これは都市ボランティアだけを取り上げていますので、例えば、大会ボランティアに申し込みをした千葉県ゆかりの市民の方々はもっといると思います。東京大会を契機にして、ボランティアに関わってみたいと思った方は、相当の人数がいたことが把握できると思います。

枠に対して2倍以上が集まったこととなりますので、書類選考・抽選という形で、半数以上に落選通知をして、3,000人に絞った形となります。そこから基

本的な研修を受けた約 2,800 人を採用者としました。その後、様々な研修を重ねた矢先にパンデミックで大会延期になりましたので、そこから徐々に、個々のいろいろなお考えや生活環境の変化等で辞退をされる方が増えました。最終的に 2021 年 3 月から正式な意向確認を行い、最終登録者は 1,400 人を徐々に切っていく形になりました。直前期まで大会が有観客なのか無観客なのか、発表がなされずにいましたので、私たちもどういふ活動を打ったらいいのかを決定できない時間が長く続いていました。直前期になって、リモートによる活動のご協力を仰いだ結果、具体的には精査中ですが、実際に活動できた方は 300 人超程度が千葉県内の都市ボランティアとして、大会期間中に活動した実際の人数になるのではないかとみています。



先ほどの動画でもご紹介しましたが、具体的な都市ボランティアの取組みについて見ていきます。2018 年夏頃に応募のキャンペーンを開始し、シンポジウムや募集説明会を実施すると、毎回定員の 2 倍くらいの応募があるという大きな反響がありました。私たち県の職員などもいろいろなところに出向いて、東京大会に向けたボランティアへの理解を促す出前講座を行い、延べ 2,000 人近くの市民の方々が参加されました。後ほど詳しく千葉市の峯岸さんからご紹介がありますが、千葉市は募集の前から「チーム千葉ボランティアネットワーク」という登録制度を立ち上げています。募集開始前から市独自の取組みとして大会後のボランティアの受け皿を意識した取組みの構想を持って立ち上げられたものです。都市ボランティアの応募は 3,000 人の枠に対して 2 倍以上の申し込みがあったわけですが、属性を見てみますと 50～60 代がボリュームゾーンでした。20～30 代は軒並み働く世代で忙しく応募は伸び悩みましたが、頑張ったのは 10 代です。応募可能年齢は 18 才以上（高校 3 年生以上）という限られた対象ではありますが、13%の応募がありましたので、若い世代の関心の引き込みは一定の成果を出しています。

約 2,800 人の採用者に対して、各種研修を行いました。研修は非常に充実したものになっていまして、組織委員会（大会ボランティア）と内容を共有するテキスト以外にも、千葉県独自でご案内ボランティアのいろはを学ぶテキストや書き込み式でご案内マップを作成するハンドブックを配って授業をしました。また、障害のある当事者の講師をお呼びして、ワークを通して障害について理解を深める「障害平等研修」なども受講していただきました。千葉市内では国際大会がいろいろと誘致されていまして、大会において実地研修も行って準備を進めていたという状況があります。成田市では、ロンドン大会の都市ボランティ

アを招聘して、おもてなしイングリッシュを教えていただく研修を行うなど、各エリアで特色ある研修を行っていました。パンデミックが発生してからは、オンラインになりますが、ボランティアのモチベーションを1年間継続するために交流会を行いました。ボランティア自身では独自のテーマを設定してグループを組み、ご案内のテクニックの共有やハラルフードが食べられる場所を調査して回るなど、大会期間中に役立つ知識を習得しようといういろいろなテーマで研鑽されていました。

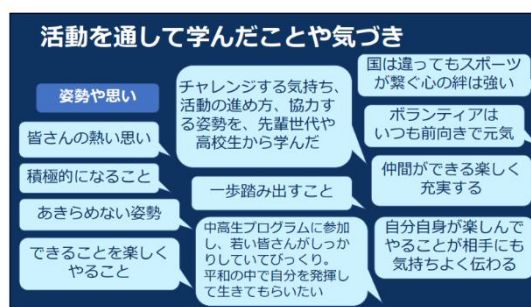


続いて大会期間中の活動について説明します。リモートボランティアの形で、千葉県独自の活動が展開されました。自治体状況によっては取り組めなかった自治体もありますが、空港エリア、千葉会場エリア、成田市内エリアで、リモートボランティアを企画して行っていま

した。特徴的だったのは、「オンラインバーチャルツアー」で、2カ月間の短期決戦で企画。オンラインで海外のゲストをお招きして、外国語で千葉の魅力をご紹介する1時間のツアーを運営しました。これに取り組んだのは30数名の運営メンバーでしたが、それに対して海外や国内の外国人の方は100名を超える一般参加がありました。例えば中国語ツアーでは、サイクリングで千葉県内を案内し、途中でグルメを調達して、最後に宴会をするという仕立てのものです。クイズなどを用意して、ゲストがより楽しみながら千葉の魅力を知るという工夫が凝らされていました。スペイン語のツアーでは、電車に乗って成田空港から銚子まで旅をするというツアーです。都市ボランティアの方が描いた水彩画を使い、車窓の景色や電車の音を聞かせながら、あたたかも電車に乗っているというツアーをされていました。英語のツアーはいろいろなバリエーションのものがあり、成田や佐倉を散策するライブの動画を見せたり、兜を作ったり、それをかぶってみんなで記念撮影をしたり、神崎の酒蔵のツアーだったり、オリジナルのものが企画され、喜ばれました。外国人ゲストの満足度は非常に高くありました。本来であれば、現場に立っておもてなしをしたかったところがオンラインに変わったと言えども、親身になってゲストの方をツアーでおもてなししてくれたというところや、言語だけではなくて、笑顔、ボディランゲージ、クイズ、いろいろな方法を使ってコミュニケーションを取ろうという姿勢、そういった思いがゲストに伝わったと思っています。

成田空港では、分身ロボットを使って大会関係者や選手のお見送りを行いました。これも千葉県独自の取り組みです。どんな方でもロボットの操作者になって遠隔で操作することで、現場と操作者をつなぎ、いろいろなサービスを提供でき

るようになります。都市ボランティアは、比較的シニア層が多いので、感染症の影響下で現場に立って活動するのは不安だという方が多くいました。こうしたことから、オンラインでつないでおもてなしができないか考えていたところ、東京2020 大会オフィシャルコントリビュー



ターの日本財団ボランティアサポートセンターより協力をいただき、無償でロボットを提供してくださることになりました。ボランティアがロボット操作のトレーニングをし、空港のおもてなしブースでロボットやオンライン会議システムを介し、画面上でつながる形で選手を送り出しました。県民の皆さんが作ったグッズをブースでプレゼントとして持ち帰ってもらうこともできました。

それら以外には、都市ボランティアが取材をしてニュースレターにまとめ、さらに外国語に翻訳してボランティアの目線の東京大会を外国の方にも伝えていく活動も行われました。後ほど、ニュースレター等の URL をチャット欄にご紹介するので、ぜひお読みいただければと思います（注2）。県民の皆さんが作った折り紙のグッズなどを、先ほどのブースを経由して選手にお渡しするという連携もうまく出来ました。

東京大会の前にもいろいろな大会があったわけですが、ロンドン大会のボランティアの活躍が特に素晴らしかったと評価が高いことは有名です。これまで千葉県は2017年からイギリスの地方都市コベントリーの都市ボランティアとの交流をしています。大会期間中にはコベントリーの都市ボランティアとボランティアの価値などを話し合うオンライン交流会も行っていて、大変盛り上がりました。

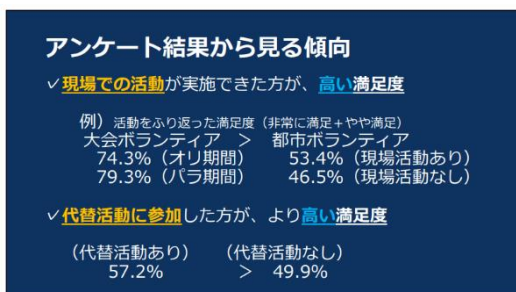
その他、情報発信活動として、説明会や個別相談などを経て、都市ボランティアそれぞれがアカウントを持ち、県の公式 Twitter やインスタグラムの情報をシェアしたり、オリジナルの投稿をしたりして、選手の応援や千葉の魅力を伝える情報の拡散、ボランティアの様子を見える化する活動に取り組んでいただきました。千葉市や成田市では、千葉の魅力を発信する動画を都市ボランティアの出演で制作して YouTube で発信をしたり、アイルランドと交流のある成田市では選手に向けた応援メッセージを撮影して SNS で届けたりもされていました。

中高生に向けての体験プログラムということで、当初は1日だけ現場に行ってお案内のサポートをすることを考えていたのですが、それができなくなってしまったので、オンラインで成田空港のユニバーサルデザインのスポットを勉強してもらい、ロールプレイングで案内をする練習を行いました。

大会後に千葉県が実施したアンケートから読み取れる声としては、リモート

の活動にはなりましたが、ボランティア自身が最後まで諦めない気持ちを持ってできることを楽しくやろう、仲間から学ぶことが多かったなど、さまざまな前向きなコメントをいただいています。D&I（ダイバーシティ&インクルージョン）が大会の理念の1つでしたが、そうした考え方に加え、SDGs や LGBTQ というトピックについて初めて知った方、障害について理解を深め、多くの気付きを得たという方も多くいらっしゃいます。たとえば、障害平等研修で「障害とは何」という問いを投げかけても、初めは似たような回答しか出てこなかったのですが、研修が終わった後にはたくさんの数や内容の回答がたくさん出てきました。ボランティアの世界がどんどん広がっていることが研修でも確認できました。リモートでも新しいオンラインのスキルが身に付いたり、バーチャルツアーで外国語を使って外国人ゲストと対話をしている仲間の様子を見て、これからも語学のスキルを磨いていこうと向上心が沸いたという方もいました。

感染症の状況から、緊急事態下において、ボランティアはどんな形が求められるのだろうか考えるというところで、ボランティアの本質を考える、いろいろな思考が働いた期間だったように思います。延期になったことで仕方ないという残念な声が多かったのですが、それでも前向きに世界平和を願いながら、いつか活動できるときにまた頑張っていきたいというコメントも多くいただいています。

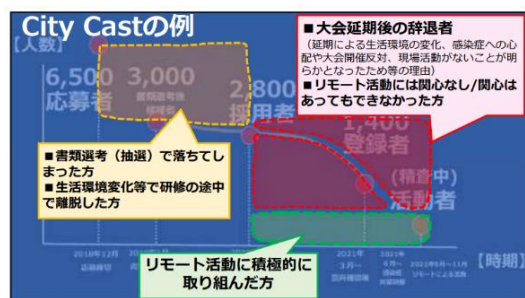


日本財団ボランティアサポートセンターが大会ボランティア・都市ボランティアの両方を対象としたアンケートを行いました。(スライドの) 上が都市ボランティアで下が大会ボランティアですが、紫の点線の左側の青とオレンジ（非常に満足、やや満足）を見ると、いずれにしても

大会ボランティアの方が現場に立った活動をされていますので、結果、満足度は50%を超えています。都市ボランティアでは、代替活動があったところとなかったところで差がありますが、代替活動であっても、活動に参加した方の満足度は50%を超える結果が出ています。

まとめますと、感染症影響下で大会ボランティアや都市ボランティアについて、いろいろと議論がありました。何がいいとか悪いとかというのは、一概には言えないと思っています。活動できた内容や活動量はエリアによっても、個々においても非常に大きな違いがあります。今後の活動を考える上で大事なことは、活動できたというポジティブな少数の状況だけを見るのではなく、これまでの長い期間の取り組み実績を振り返って、非常事態で活動できず残念な思いをしているが、ボランティア活動の意欲のある方々が引き続きボランティアを中心

的にけん引していける存在になっていけるアプローチや、発展した環境づくりを考えていくべきではないかと考えています。(スライドの)表のとおり、辞退してしまった、応募をしたのにそもそも採用されなかった、リモートではデジタルデバイドの問題で参加できないなど、いろいろな事情で参加できなかった方がたくさんいます。この方々を諦めるのではなく、どうアプローチしていけるかが大事です。リモート活動でも積極的に取り組んだ方を中心にしながら、やりたかったができなかった方を諦めずに引っ張っていける取り組みができればいいと思っています。都市ボランティア・大会ボランティア以外にも、県民の自発的なボランティアがさまざまありました。そういった方々も一緒にけん引していける仕組みを考えていくような議論が後半にできたらと思っています。前半の発表は以上です。ありがとうございます。



【馬場】仁平さん、ありがとうございました。この話だけ90分間、聞きたいくらいです。短い時間でしたが、ありがとうございました。もしかしたら参加の皆さまに分かりにくいかもしれないのが、大会ボランティアと都市ボランティアです。ボランティアは、大きく2つに分かれているのをご理解いただきたいと思います。今、仁平さんに話していただいたのは、大会ボランティアではなく都市ボランティアで、自治体で集めて研修し活動するものです。この後、私からお話させていただくのは、大会ボランティアです。



私を含めた演者の3人は、車いすフェンシングの大会ボランティアに関わりましたので、その話を事例として紹介させていただきます。今回、私たちが関わったのは車いすフェンシング競技です。車いすに座って行う競技です。私は、以前からこの競技に関わっていたわけではありません。偶然がつながって、関わることになりました。2018年12月に京都でワールドカップが開かれることになり、ボランティアを派遣することから関わることになりました。派遣することに関わったきっかけは、実は協会本部が京都にあるからです。一般募集のボランティアだけでは東京2020大会のオペレーションが十分にできない危機感をお持ちになり、当時千葉でボランティアを育成しようと考えていたようです。協会負担で千葉から京都にボランティアを派遣し、本番で活躍してもらいたいという構想でした。

協会の担当理事の方が県内をいろいろ回ったそうですが、困り困って巡り巡

って、私にたどり着いたと聞いています。当初は何が何だかよく分からなかったのですが、いろいろとコミュニケーションを取っていく中で必死なのだ分かりました。私はこの競技に全く関わっていなかったのですが、何とか協力しようと決心して取り組み始めました。さらにそのきっかけは、2016年から県と市で実施している「パラスポーツフェスタちば」です。私はパラスポーツの専門家ではありませんでしたが、事業やイベント運営の専門家だったので第1回の実行委員から関わらせていただいています。パラスポーツフェスタちばでも車いすフェンシングの体験ブースは当時からあったのですが、数競技のブースの一つという認識程度で直接関わっていたわけではありませんでした。私は資格の研究が専門で、2015年に県内の障害者スポーツ指導者資格を持っている方の実態調査をさせていただいたことがパラスポーツに関わることになったきっかけです。そこからなんとなくパラスポーツに関わり始めている間に、東京2020大会に関わるようになりました。

2018年10月、京都へのボランティア派遣を前提に説明会と研修会を開きました。このときは東京2020オリ・パラ大会というよりも京都に行ける学生、行きたい学生数名の研修会でした。機材を車に積んで市原市の大学まで来ていただき、研修会を実施しました。ボランティアが何をするのか全く分からなかったのですが、ピストという台に車いすをいかに早く正確にとめるのかという業務だということも初めて知りました。この研修を受けて、帝京平成大から3名、千葉大から1名を京都に派遣することができました。実は、今年の本大会にもこの4人全員が参加できました。1年延期になったこともあり、奇跡だと思っています。これは実際に京都に行った様子です。ホテルの宴会場を広く使って、ワールドカップが開催されました。私は写真しか見ていないのですが、1週間の業務に行ってもらいました。千葉からは4人だけですので、現地のボランティアとの共同作業になりました。スタッフが少ないので、プレゼンターのサポートも経験してきたと喜んで写真を持ってきました。IOC主催ではなくNF主催だったので、東京2020大会に比べて肖像権やスポンサーの規制が緩く、選手と気楽に話したり、カリスマのベベさんとも写真を撮ったりしていました。写真を見るだけでは彼女がどれだけ有名な選手なのか知りませんでした。東京2020大会に関わることで後から気が付きました。良ければ、後で検索して調べていただけたらと思います。

当初、私もボランティア登録をしていたので、東京のオリンピックセンターの共通研修に行きました。ボランティア未経験の方を前提とした丁寧な研修だったと感じました。本番用のユニフォームが飾ってあり、これを見てテンションが上がりました。東京で開催されていたので、東京に行くのが面倒だと言って二の足を踏んでやめた学生もいたのですが、その後の追加募集ではコロナで全部オ

オンラインになったので、参加のハードルが下がって希望者が増えたという現状もあります。

大学でも 2019 年からは、放課後に学生を集めて研修会を実施しました。座学と実技をやりました。大勢の学生を集めてどんどんトレーニングをしていったという状況です。帝京平成大学はスポーツ系の学生が多いのですが、強化指定部しか本格的な部活をしていないので、時間的に余裕のある学生が多いことが幸いしたと思っています。自主トレ部屋を大学に準備していたでいて、空き時間に学生がここでトレーニングできる環境も作っていただきました。



県内の大学連携ということでは、敬愛大学などボランティア仲間の先生方にお声掛けをして、ボランティア学生の拡充が実現しました。京都に行った学生がサポートに入ってお手伝いしました。千葉大学でも実施していただきました。各大学で行いましたが、大学の枠を超えて、日程が合えば他大学のキャンパスに行って研修を受けるという取り組みもしてきました。植草学園大学でも実施していただきました。千葉からは遠いですが、筑波大学でも実施していただきました。筑波大学は、教員のつながりというよりも大学事務組織が協会につながって実現したようです。参加大学の中で立命館大学から個人参加した学生がいたのですが、現地で合流して一緒に活動しました。全体的には体育・スポーツ系以外の学生が多かった印象です。

参加学年

参加者	2名	2名	0名	30名	30名	
2021年	4年			3年	2年	
2020年	3年	4年		2年	1年	追加:7月×切
2019年	2年	3年	4年	1年	高3	追加:7月×切
2018年	1年	2年	3年	高3	高2	募集:12月×切
希望者	10名	5名		40名	35名	

・組織委員会の共通研修がオンラインになったことで、追加登録学生にとっては参加しやすくなった。

・車いすフェンシング協会の研修会が最後まで実施できなかったことから、追加登録の学生は不安が大きかった。

・コロナの不安や実習・家族の心配により辞退する学生も少なくなかった。

ここで予想していなかったコロナ禍になりました。見ていただきたいのは、赤の枠で囲っている募集時期です。当初は2018年12月締め切りの募集でした。このときは1年生が10名、2年生が5名程度でした。2020年に3年生、4年生になることが分かっていたので、その段階でボランティア参加するかどうか迷って募集が少なかったように思います。ところが、2019年に追加募集があり、このときの1年生が40名くらいドンと入ってきました。延期になった2020年の春にもう一度、追加募集がありました。2020年の1年生は35名ほど入ってきました。2018年に1年生だった学生が2021年に4年生で参加したという状況です。2018年12月に締め切る募集だったので、学生はこのタイミングでなかなか参加しにくいボランテ

アイデアだと思っています。公式ではないですが、結果的に追加募集があったおかげで、今年の2年生、3年生が多く参加できたという状況です。コロナが心配でやめる学生も多くいました。共通研修がオンラインになったので、追加の登録学生は参加しやすくなったという面がありました。追加の学生は、最後まで日本車いすフェンシング協会の研修会が実施できなかつたので不安が大きかったのですが、その不安を「大丈夫だよ、大丈夫だよ」と言ってつなぎとめてきました。コロナの不安や本学は医療系の大学なので実習があつて辞退しますという学生も出たのですが、結果的に60名程度の学生が参加できました。ここまでが私の話です。この後、大会期間中の活動について、植草学園大学の遠藤先生にバトンタッチしたいと思いますので、よろしくお願いします。

【遠藤】 それでは、私の発表に移らせていただきたいと思います。植草学園大学の遠藤です。よろしくお願いします。私と本シンポジウムのコーディネーターの馬場先生、同じく発表者の藤森先生と共に国内技術役員として実際に大会に参加したことより、今回の発表の機会をいただきました。ありがとうございます。大会に関わる経緯は今、馬場先生がお話しされたので割愛させていただきます。基本的に千葉県内を中心とした7大学の学生でFOP (Field of Play) という競技エリアのボランティアを担当することになりました。競技エリア外のボランティアもたくさんありますが、こちらの学生は競技エリア内を担当しました。大会に至る準備のポイントとしては、それぞれの大学で募集をして研修をしましたが、コロナによって辞退する学生が多かつたこと、再募集をしてメンバーチェンジがありました。再募集した学生はなかなか実技研修ができないまま、2021年8月の本大会を迎えたことなどが挙げられます。実際にボランティアに参加したFOPの学生は、1日ごとにだいたい100名前後です。これに日本車いすフェンシング協会スポンサーの住友三井オートサービスの社員ボランティアの方が10名前後加わり、約110～120名が毎日参加しています。当初の目標数には至らなかつたのですが、結果的には過不足のない適度な人数でした。



では、本題のFOPとして学生が行つた活動についてご説明いたします。FOPの活動に関しては、私たち国内技術役員が指示を出して彼らの運営のサポートをしました。FOPは主に競技会場内での仕事ですが、競技会場に入る前から仕事があります。コールルームという招集の場に選手や審判が集まります。試合会場は5色のピストで分かれていますので、色ごとにここで並んでもらい、入場と退場の

エスコートをする仕事がありました。

また、並んだ先頭の4人は、武器の運搬をする仕事をしました。ただし、団体戦と個人戦、さらには予選、準決勝、3位決定戦、決勝、とで並び方が全て異なっていて、対応がすごく難しかったところでした。この並び方は、試合ごとだけではなく、毎日様々なところから修正があり、微調整が行われました。こちらが実際の様子です。このように学生が選手たちを並ばせます。入場するとき誘導したり、車いすを後ろから押してサポートもしました。競技用の車いすと移動用車いすを使い分ける選手もいましたので、競技用の車いすだけを運搬するサポートもしました。こちらが武器の運搬の様子で、専門のバッグに武器を入れて試合会場に運びました。こちらは実際に会場に掲示された誘導の行い方の図です。会場は赤、緑、グレー、青、黄色の5色に分けられています。こちらがコールルームになって、ここから入っていきます。このようなルートで進む指示があり、試合の種類によって異なっていたのでこれも難しいところでした。スポンサー関係では、当初はスポンサーボードの前を通ってはいけないなど、色々と決まりがありました。最終的には試合進行重視になり、スポンサーボードの前を通れるようになったなど二転三転と変更があり、学生が混乱した部分もありました。FOPとしてのメインの活動は、会場に入った後の仕事です。



その1つは、試合会場のピストに上がるまでスロープがあるのですが、なかなかスロープを上がるのできない選手もいるのでこの移動のサポートです。そしてメインの仕事は、フレームに車いすを取り付けることです。このフレームは利き腕の違いによって回転させます。あとはリーチの違いでディスタンスという距離感を調整する

仕事もあります。また、バッグに入れた武器を選手に渡したり、試合が終わった後にはピスト全体を消毒する仕事をしました。ピストの固定について練習風景でご説明します。このように車いすを台の上に乗せて、台にあるサイドアームで車いすの車輪部分を固定します。最後にセンターベルトで車いすの前足の部分と台をガッチリと固定します。これは本学での研修の様子ですが、30秒間で取り付けられるように練習をしました。では次に、実際にボランティアに参加した学生の声をお聞きください。植草学園大学の吉原さんです。

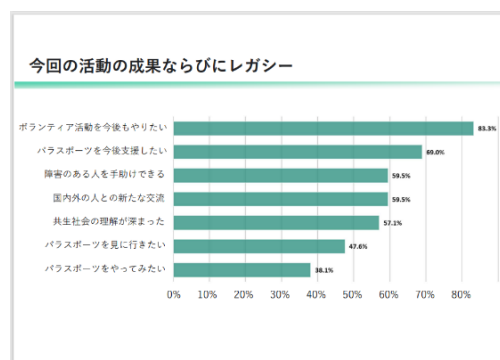
【吉原】今回、私が東京パラリンピックのボランティアを志望したきっかけは、大学でボランティア募集のポスターを見たことです。正直なところ、私自身こういった経験はあまりなく、これまで開催されてきたオリンピック・パラリンピック

クも自分から興味を持って見たことはほとんどありません。ただ、なんとなく目に留まり家族に相談してみたところ、一生に1度かもしれない貴重な経験になるということ、私の弟がやりたいと言っていました。年齢の関係でできなかったこと、大学のサポートを受けながらできるということもあり、ボランティアに応募することにしました。活動内容としては、車いすフェンシングの競技運営に携わりました。競技会場で選手、レフェリーの誘導、車いすをピストに取り付ける作業、ディスタンスの調整などの重要な役割にとっても緊張して臨みました。それらを効率的かつ丁寧に行うために、その日初めて会った仲間と協力し合いながら、楽しく活動することができました。しかし、コロナ禍での開催ということと国際的な大会であることで大変だったことや難しいと感じたこともありました。1つ目は、研修等がオンラインになり、練習があまりできなかったこと、当日一緒に活動する仲間との交流が事前にほとんどなかったことです。そのため、会場に着いてからも活動内容や車いすの取り付けなどに不安はありました。その場で確認はしたものの、やはり臨機応変の部分が多く、難しいと感じました。2つ目は、コロナ禍でパラリンピックのボランティアをすることに対して、周りの人があまりいい印象を持ってくれなかったことです。ユニフォームの受け取りや大会間近の研修でたくさんの人に会っている私に会うことが不安だという知り合いが何人かいました。1人暮らしをしている私にとって、人に会えなくなるのは重大なことに思えて、悲しかったことを覚えています。しかし、それ以上に楽しかったことがたくさんあり、さまざまな場面で大切な思い出が多くあります。同じボランティアの仲間をはじめ、選手やレフェリーなど、たくさんの方々と交流することができ、普段人見知りの私もその波に飲まれて、一緒になって盛り上げたり、話をしたりすることができて、とても楽しかったです。また、選手の熱気や多くの人が同じ目標に向かって協力し、成功させようという環境の中で団結力や達成感を感じ、胸がいっぱいになりました。今回のボランティアがなければ、この先関わることはなかったかもしれない車いすフェンシングですが、大会を通して観戦し、その迫力に夢中になっている自分がいました。そして、実際に接している選手だからこそ一緒に戦っている気持ちになり、息を忘れるほどの緊張で感情が忙しかったです。これらを仲間と共有し、一喜一憂しながら楽しむことがスポーツの魅力だろうと感じました。この気付きは今までスポーツとあまり関わりのなかった私にとって、この先スポーツと人生を共にする上で大きな一歩だと感じています。パラリンピックでのボランティアを振り返り、改めて人と関わり合いながら生きていること、人が人と出会うことで成長する、力になるということ学ぶことができました。選手の抱える障害はさまざまでしたが、全ての選手が一生懸命に戦っていて、そこにはまさに障害と生きる強い姿がありました。その姿を間近で見て、この人たちのために何かしたい、一緒

に話したり、大会を楽しんだりしたいと思い、試行錯誤して考え、勇気を出すことができた私は、選手に出会ったことで成長できたのではないかと思います。それと同じように選手たちにも私たちボランティアに出会ったことで、何か少しでも力になっていたら嬉しいです。最後に私は英語が得意ではないため、聞き取れたとしても言葉で返すことがあまりできませんでした。ここに焦点を当てると、私は言語に困難があることになり、障害のあるなしに関わらず誰も1つくらいは難しいことがあると思います。一番大切なことは、その人とコミュニケーションを取りたい、何かしてあげたいと思って考え努力すること、その気持ちを持つことだと実感することができました。

パラリンピックのボランティアを通して経験したこと、学んだこと、思い出は私にとって一生の宝になると思います。この経験を大切に、この先の人生に生かしていきたいです。ご清聴ありがとうございました。

【遠藤】吉原さん以外の今回の参加学生の声もまとめるために、この発表に備えて11月にグーグルフォームを使って参加学生に事後アンケートを取りました。ボランティアはすでに解散していることもあって連絡の取れない学生も多かったのですが、42名からの回答を得られました。回収率は分かりません。年齢構成は再募集をしたこともあり、2～3年生がほとんどでした。この集団の特徴として、ボランティア経験は今回が初めてという学生が半数である、一方で6回以上の経験がある学生が35%程度いたことが挙げられます。ボランティア志願の動機については「国際的なスポーツイベントに関わりたい」が約90%、「大学で手軽に応募することができた、面倒を見てもらうことができた」が83%で、これらが非常に大きな動機になったと考えられます。「パラスポーツに興味があった」が43%、「新たな交流をしたい、友達に誘われた」が3割程度でこれらに続きました。今回のボランティア活動の感想については、このバーの色で、赤やオレンジの暖色系が「そう思う」などの肯定意見、水色や青の寒色系が「そうは思わない」などの否定意見になります。今回のボランティア活動は「充実した、楽しかった」という意見が驚くことに100%になっています。他に「新たな友人ができた、国際交流ができた、パラスポーツに興味を持つようになった」が80%以上となり、非常に満足度が高く、また意義のあるボランティア活動になったと考えられます。活動自体については「分かりやすかった」という意見が6割以上です。ただし、「忙しかった、時間が長かった」という意



見も 50%程度ありました。最後に、今回の活動成果とレガシーに関する回答です。83%が「今後もボランティア活動をしたい」、さらに 69%が「パラスポーツを今後も支援したい」と回答し、今後パラスポーツの支援に繋がる可能性が考えられました。また、半数以上が「障害のある人を手伝いできるようになった、共生社会の理解が深まった、パラスポーツを見に行きたい」と考え、共生社会の理解や実現にもつながった可能性も示唆されました。また 40%程度ではありましたが、「パラスポーツ自体の興味にもつながった」という回答が得られました。

以上から、本発表を総括します。学生ボランティアは、次々と多様な要求があっても、学生間で協力して臨機応変に対応し、大きなトラブルなく無事に大会を終えることができました。また、ボランティアのマナーについて、他競技のボランティアに比べて良かったとの評価もいただきました。実は、われわれ役員や審判は怒られることが多かったのですが、学生のボランティアの活動ぶりに関しては国際車いす・切断者スポーツ連盟や日本車いすフェンシング協会から最終的に褒めいただきました。これらが可能になった一因は、大学でボランティアを募集したため、ボランティアの管理や指示が伝わりやすかったこと、ボランティア経験の豊富な学生が適度について、リーダーシップをとってくれたことなどが考えられます。また、参加した学生が個々で活動に満足しただけでなく、共生社会の理解を深めると同時に新たな仲間と協力するなど、我々の想像以上に人間的にも大きく成長させていたことを感じました。

今回の活動で様々な経験をし、成長した学生を今回の活動のみで終わらせず、次の活動へつなげることが重要課題であると考えられます。そのため今後、行政の対応やわれわれの考えるレガシープロジェクトに対する期待が大きいと思っています。発表は以上です。ご清聴ありがとうございました。

【馬場】 遠藤先生ありがとうございました。この競技は、大会ボランティアの中でも特に選手とすごく近い位置で活動ができたので、他の競技よりも満足度の高い結果になっているのではないかと個人的に思います。ボランティアは活動時間が決まっているので、朝からと午後からのシフトに分かれています。われわれ国内競技役員は、毎日朝 7 時集合で、解散が夜 10 時、11 時くらいでした。ここまでの都市ボランティアと大会ボランティアの活動の話でした。ここからは、これからの話に話題を替えまして、行政の県と市、大学の立場からお話をさせていただきます。では仁平さんに再度登壇していただいて、県のこれからの取り組みを含めたお話をさせていただきますでしょうか。よろしく願いいたします。

【仁平】 では、スライドを共有させていただきます。お時間が詰まっているようなので、端的にいきたいと思います。冒頭で紹介させてもらった 2017 年 12 月

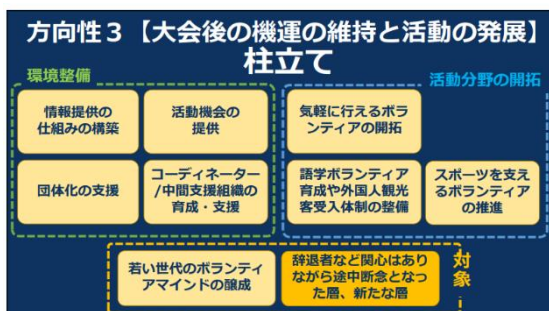
策定の千葉県の「東京 2020 大会に向けたボランティア推進方針」で、どんなことを掲げ、それがどこまでできたのか、できなかったのかを踏まえて、今後につなげていきたいと思っています。この方針では 3 つの方向性を示しています。方向性 1、2 が大会前と大会期間中も含めた活動です。3 が今後に向けたところですので、特に 3 を中心にお話したいと思っています。この辺の説明については、千葉県全体の見解という形では整理しきれているものではないので、仁平が私見として検証したお話ということでご理解いただければと思います。

まず方向性 1 では、「多様な人材の活躍を促進」することを掲げていました。これについては、一定の成果が出たと見えています。各地で行った説明会やシンポジウム等には多くの参加がありました。こういった巻き込みには、たとえば障害のある方や子育て中の世代の方にボランティア参加ができますとメッセージを常に発信して、配慮も行っていました。普段であれば、一見、ボランティアされる側と認識されてしまう方も、むしろボランティアをする側に参加いただけたのは、東京大会の大きな成果の 1 つだったのではないかと思います。

方向性 2 は、「質の高いおもてなし」を行ってきたいということで、語学スキルだけではなく D&I など、さまざまな観点からいろいろなスキルを向上する講座を開きました。実際にアンケートからも、こうした機会をいただけて日々大きな学びをもらったという感想をいただいています。また、関係団体との協力という視点にも力点を置いていました。さまざまな面接や研修を運営する場面において、いろいろな県内の協力団体のアシストを実際にいただいていた。本日出席の馬場先生や藤森さんなどにもご協力をいただいていたが、計画等を検討する分科会などにおいて、実務者や有識者からのご意見を反映し、立案していきました。また、日本財団ボランティアサポートセンターと千葉県では協定を結んで、ボランティア育成にかかるシステムの提供や分身ロボットの無償貸与、講師派遣など、いろいろな協力も得られることができました。県レベルでこうした専門機関と協定を結んでボランティア育成に取り組んだのは、かつてなかったことかと思っています。他、感染症影響下でできる形は大きく変わったかもしれませんが、リモートボランティアという新しい形を見出して、千葉県独自のさまざまな活動ができたことも、新しいおもてなしの形として評価できるのではないかと思います。

一方で、マイナスなこともあります。感染症という状況により、コントロールを超える部分ではありましたが、大量の離脱者があったことです。また、自治体は、コロナ禍における優先的な行政課題が他にも多くありますので、それに注力しなければならない一方で、ボランティアの身を守りながら、活動の推進も行うというジレンマがありました。さまざまな困難や限界があった中で、ボランティア活動の内容や量に大きな差が生まれてしまいました。これらを今後、どう埋め

ていけるのかも関心としてあります。リモートのボランティアは、現場に立ちたかったボランティアにとってみたら、そもそも想像していたことではないので、やりたくないという方もいました。リモートとなると、デジタル端末をある程度操作できることが条件になってくるので、どうしてもデジタルデバインドという問題があったと思います。



改めて、3つ目の方向性は、今後、「機運の維持をどうしていくのか、活動の発展をどうしていくのか」です。計画には環境整備に関する事、活動の分野の開拓に関する事、対象の認識などを整理して書いています。それらを考える上で特に大事だと思っているのは、

ボランティアの関心をどう広げていけるかです。今回のシンポジウムのテーマでは、スポーツボランティアが中心かもしれませんが、実は、スポーツボランティアといっても、国際交流やパラスポーツ、いろいろな観点でボランティアの関心があったと思います。行政主体としては、ボランティアは市民社会を担っていく大きな1つのセクターと認識していますので、高齢者や障害者福祉、医療、災害、子どもの育成、環境保全という、さまざまなボランティアの分野に関心を広げていただきたいと思っています。ただ、いきなりボランティアの関心がこういった分野に及んでいくのは簡単なことではありません。特に今回、成功体験が薄い、ない状態で終了してしまったボランティアもいるわけです。どのように働きかけを行っていけば、東京大会で期待していたような体験を行えて、かついろいろなところへの関心がさらに広がっていく仕掛けが作れるのかを切り口として考えていく必要があると思います。



また、ただボランティアとして参加する側からリーダーとして活躍したり、活動を自ら企画したり、コーディネーター側に回っていくボランティアの成長モデルがあると思います。参加だけで止まってしまうのではなく、どんどん裾野を広げていくには、厚みあるボランティアに関わる層を育成していくことが必要ではないかと考えています。

これらを整理しつつ、環境整備、特に情報提供の仕組みの構築については、千葉市よりこれからお話があると思います。県としては、活動機会を提供していく上で、特にボランティアを受け入れる側、要はボランティアがモチベーションやスキルを上げながら引き続き活動していける場を用意する側が、ボランティア

の価値を理解して、環境を整えていくさまざまな取り組みをできるように支援していくことが必要ではないかと考えています。そこを中間支援としてコーディネートする存在を育てていくことが、県という広域、中域的な行政主体として、てこ入れをしていくべきだと考えています。

また、若い世代をどんどん育成することはとても大事だと思っています。さらに辞退した、関心があったができなかった方もたくさん眠っていますので、そういった方をもう一度、何らかの形でボランティアに関心を引きつけて活動してもらう環境を整えることもやっていきたいと考えています。繰り返しになりますが、最後に、ボランティア受け入れ側の正しい理解の促進、そしてボランティアを受ける体制を準備していくことが行政の支援として、これからやっていきたいと考えています。以上です。

方向性3【大会後の機運の維持と活動の発展】
柱立て

環境整備 活動分野の開拓

ボランティアの状況や関心、スキル・知識の違い、今後の成長などを意識した、ボランティアに寄り添ったマネジメントができる、「ボランティア受け入れ側の正しい理解の促進」と「ボランティア受け入れ体制の準備への支援」が必要

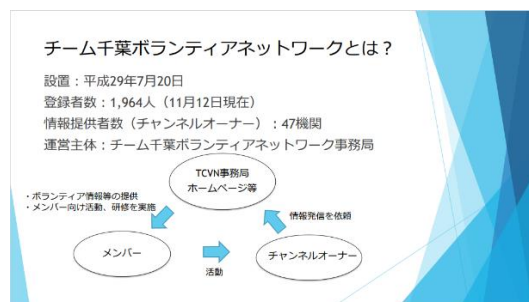
若い世代のボランティアマインドの醸成 対象
辞退者など関心はあ
りながら途中断念とな
った層、新たな関心層

【馬場】コンパクトにまとめていただいて、本当にありがとうございます。最後のスライドに出ていた受け入れ側、いわゆる主催側をどうしていくかという問題は、いろいろな会議でも今一番の問題意識だと思っています。では、続けて千葉市の取り組みについてご紹介いただこうと思います。峯岸さん、お願いします。



【峯岸】皆さん、こんにちは。千葉市オリンピック・パラリンピック調整課の峯岸と申します。本日は貴重なお時間をいただき誠にありがとうございます。私からは千葉市の取り組みとして、チーム千葉ボランティアネットワークについてお話しさせていただきます。スライドは用意していませんが、簡単に私の自己紹介をさせていただきます。平成30年からボランティアに関する業務に携わっており、千葉県仁平さん等と一緒に都市ボランティアの募集・育成・活動を行ってきました。

それでは、本題に入ります。千葉市では、都市ボランティアの受け皿となる団体として、チーム千葉ボランティアネットワークを設立しました。チーム千葉ボランティアネットワークは、都市ボランティアを募集する前の平成29年7月20日に設立し、ボランティアをしたい人と



ボランティアを募集したい人をつなぐ団体です。仕組みは、下の図に書いてあるとおりです。まず、チーム千葉ボランティアネットワーク事務局という運営主体があります。情報を発信したい、ボランティアを募集したい団体がチャンネルオーナーとなり、事務局に情報提供し、ホームページにボランティア情報を掲載します。その情報を見た約2,000人のメンバーが活動するという流れになります。

このスライドがチーム千葉ボランティアネットワークのホームページです。右上にメンバー登録があるので、ここからメンバー登録をしていただきます。実際のボランティア募集ページは、スライドのようになっています。ボランティア募集以外にもお知らせや体験会、研修もこちらでご案内しています。ここでチェックポイントです。メンバー登録すると年に複数回実施するメンバー限定のボランティア活動や研修の申し込みができるほか、ボランティア募集情報がメール配信されます。ボランティアの研修などはメンバーのみ参加できるので、ぜひメンバーになって参加してくださいと千葉市では紹介しています。

今までのボランティア活動として、2019年に中央公園で実施したアイススケートリンクを人工で作った YORUMACHI というイベントのオープニングセレモニーのボランティアやジェフユナイテッド市原・千葉さんの協力により実施した試合の運営サポートボランティアの写真を掲載しています。



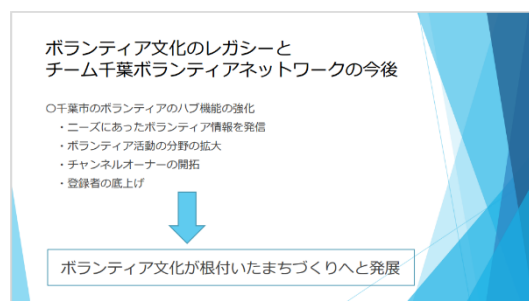
今年度は、普通救命講習や、10月に行われた千葉シティトライアスロン大会でボランティア活動を行いました。その他、過去にはジャパンビーチゲームズがあったときに大会の前にゴミ拾いをしたり、「千葉2019ワールドテコンドーグランプリ」で語学ボランティアの募集

行ったり、見学研修ではマリンスボランティアさんの協力により、どんな活動をしているのかを見学し、野球観戦をしました。ホームページで紹介しているボランティア活動は、スライドのとおりです。ホームページでは、千葉市中心の千葉県内のボランティア活動や研修を紹介しています。先ほど、仁平さんから都市ボランティアのお話がありましたので、チーム千葉ボランティアネットワーク

と都市ボランティアの関係を少しだけご説明します。千葉会場エリアの都市ボランティアの採用者数は1,604人でした。その方々にメールや動画でチーム千葉ボランティアネットワークの活動を紹介したところ、約480人がチーム千葉ボランティアネットワークに登録していただきました。千葉市では現地でのボランティア活動ができなかったのですが、継続してボランティアをやりたい方がこんなにいることは、千葉市の職員としてうれしく感じています。

ここで都市ボランティアに紹介したチーム千葉ボランティアネットワークの動画を皆さんにもお見せします。どんな活動をしているのか、参考にご覧ください。(動画視聴) ありがとうございます。ここまでチーム千葉ボランティアネットワークの今までの活動等をご説明しました。

次に、チーム千葉ボランティアネットワークの今後を簡単にご説明します。今後は、千葉市のボランティアのハブ機能を強化し、アンケート等を取りながらニーズに合ったボランティア情報の発信を行ったり、ニーズに合ったボランティア情報を発信するために活動分野の拡大を行ったりしていきます。その他、ボランティアを募集したい団体を増やしていきたいと思います。千葉市としては、このようなことを行うことで、ボランティア文化が根付いたまちづくりへ発展していければと思っています。最後ですが、チーム千葉ボランティアネットワークや募集に関するお問い合わせ先として、事務局と千葉市のオリンピック・パラリンピック調整課の連絡先を載せています。もしボランティアを募集したいということがあれば、お手伝いできると思いますので、ぜひご連絡ください。皆さんどうぞよろしくお願いたします。簡単ではありますが、私の話は以上です。ご清聴ありがとうございました。



【馬場】 峯岸さん、ありがとうございます。私は、チーム千葉ボランティアネットワークの実行委員のお手伝いもしています。オリ・パラの前からボランティアする人を増やして、オリ・パラにも参加していただきました。その後もボランティア活動を続けるための社会インフラ的なものになっていけばという趣旨で活動しています。しかし、自治体のオリ・パラ課が縮小して、どの部署がどういう立ち位置となり、どういう政策で関わっていくかはこれからだと思います。

そのようなことを考えつつ、敬愛大学の藤森先生にお話をさせていただきます。学生と直接接点のある、私と遠藤先生、藤森先生の3人で国内競技役員を担当しただけではなく、先ほど遠藤先生のアンケートにもありましたが、大学が関わることによって学生が安心感を得られるのは大きかったと思います。大学がど

う関わるかは、前回の学会大会で私が一般発表した中間支援組織をどう育てていくかという話題のヒントにもなると思います。大学関係者が多いと思うので、その辺の話を藤森先生にお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

【藤森】改めまして敬愛大学の藤森です。今日はどうぞよろしくお願いいたします。私は体育の教員ではありません。もともとは英語や中国語を教えていました。現在は、敬愛大学で地域連携を担当させていただいています。場違いな気もいたしますが、ご縁をいただきましたので、大学のボランティアのあり方についてお話をさせていただきます。

そもそも論で、ボランティアとはなにかという話をときどきしなければいけなくなります。これは以前、関西学院大学の学院長先生から教えていただいた言葉です。「ボランティアは善意である」、善意という言葉を使いやすくするために関西学院では、ボランティア活動は「言われなくてもする、言われてはしない」ものだとお話しをされてきました。ラテン語の voluntus という言葉は、「意欲」や「善意」という意味だと言われています。そして voluntus という言葉が volunteer に変化した後、イギリスでは「自発性」という意味になったと聞いています。ところが戦後、今から 50 年以上前になりますが、「ボランティア」が日本に初めて入って広辞苑に載ったときに、「善行」や「奉仕活動」という本来の自発性とは違う解釈になってしまったと伺いました。つまり、ボランティアの意味は、一部の奇抜な人、変わり者が行うものになってしまったのです。これは日本のボランティアの一番まずかったところではないかと思います。ですから大学を含めたボランティアをコーディネートする人たちには、いくつかの課題があります。

そもそもボランティアとは

**Gloria in excelsis Deo, Et in terra pax
hominibus bonae voluntatis.**

栄光が高きにある神に、平和が善意の人にあるよう。
(新約聖書「ルカ伝」第2章14節)

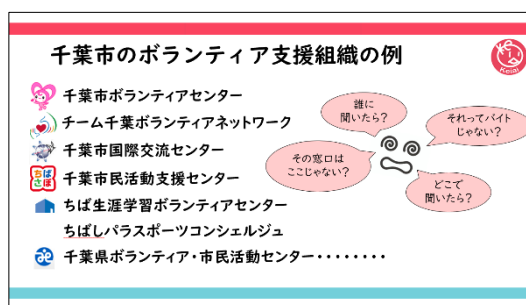
ボランティアは、それをしようとするあなたの意欲 (voluntas) から始まる。
故にボランティア活動は、言われなくてもする、言われてはしないものである。
(学校法人関西学院 田淵結元学院長)

私は大学でボランティアコーディネーターという肩書ではありませんが、例えばコーディネーターと言われる人たちが、学生にボランティアの紹介をするわけですが、さまざまな役割分担があると思います。例えば「こういうボランティアがあります」「大学生向けはこういうものがあります」「活動場所は千葉市です、あるいは千葉市外です、県内全域です」、あるいは「活動内容はスポーツに関するものです、まちづくりに関するものです、社会福祉に関するものです」と話をするボランティアコーディネーターは、おそらく各大学にいると思います。学生課やボランティアセンターの大学側でボランティア団体からの情報をキャッチして、それを学生に流す人は多くの大学にいるのではないのでしょうか。

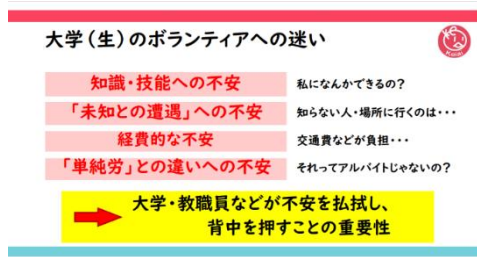
しかしながら学生目線で考えますと、ボランティア活動者のやりがいや満足

度、自己有用感は注目されてきませんでした。先ほどの広辞苑の話にあったように、ボランティアは奉仕活動だったわけです。自発性が問われるのではなく、奉仕活動をすれば「善行賞がもらえるもの」に変容してしまったわけです。また、各々のコーディネーターがいたとしても、千葉市なら千葉市のこと、千葉市ではなくて例えば何々市、何々地域、あるいは高校生向けなのか、大学生向けなのか、一般市民向けなのか、分野はどんなものか、これらを複合的に見ているコーディネーターは、実は大学にはあまり多くいません。そのようなコーディネーターはいるのかいないのかどうかも分かりません。

先ほど植草学園大学の吉原さんがビデオの中で、「車いすフェンシングボランティアを通じて達成感があった、仲間と共有できた、人は人と出会うことで成長する」と話していましたが、まさにこの部分です。彼女はやりがいや満足度、自己有用感をパラリンピックの活動を通じて得られました。しかし、他のボランティアはどうだろうかという感じがします。今、仁平さんや峯岸さんから県の取り組みや「チーム千葉ボランティアネットワーク」の話がありました。実は、2年ほど前に千葉市の会議で質問をしたことがあります。千葉市にはこれだけ団体があります。これは公的な団体ばかりです。学生は、これを見たときにどう思うでしょうか。一体、自分がやりたいボランティアはどこで誰に聞いたらいいのでしょうか。例えば千葉市ボランティアセンターは福祉の窓口になりますから、スポーツボランティアのことを聞いても答えてくれません。その窓口はここではないと言われたときに、どこに聞けばいいのでしょうか。そういうことが起きてしまいます。



大学でのボランティア支援が正課の取り組みもあるでしょうし、建学の精神や校訓、設置者の理念に関わる取り組みもあるでしょう。社会貢献や地域連携を意識した取り組みもあると思います。こういったものは学校にとってもプラスの部分があります。安易に考えれば、取り組みが新聞に載った、大学の名前が挙げられたからうれしいということはあるかもしれませんが、ただ、それ以外の大学の組織が関与しないものも多くあります。



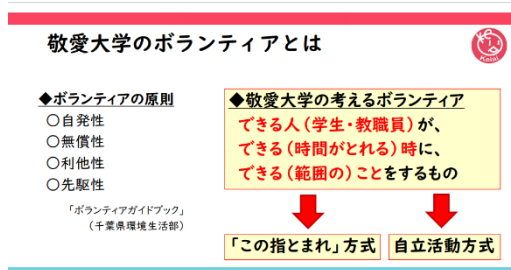
実際、大学生に会ってみますと不安を多く抱えています。ボランティアに対する不安は、自分にはできるのかどうか、知らない人や知らない場所に行くのは不安だ、交通費などが負担になる、アルバイトとどう違うのかというところで悩みます。ですから、大学や教職

員が不安を払拭して背中を押してあげれば、学生は輝くのです。その一例が吉原さんのご発表だと思えます。

敬愛大学ではどうなっているのかというと、だいたい活動団体から私どものところに、こういう活動をしたい、ボランティアを募集したいという話がまいります。しかし、大変不躰ですが、お宅さまがどういう団体でどういうことを目指していて、どういう活動経験があって、どういうことをしたいのかを一回来て説明してくださいとお願いしています。学生たちにただ伝えるだけ、チラシを渡すだけ、メールを流すだけではありません。私たちは学生たちに自己有用感をどのように持ってもらえばいいのかを考えています。逆にいうと、来てくれないところやダイレクトメールだけのところは、私どものところでは見ないようにしています。学生に紹介する自信がないからです。来ていただいて、学生が自己有用感、達成感、満足感、やりがいを感じてくれるものであれば、ぜひ紹介させていただきますと逆にお願いをいたします。そうではないものやアルバイトとして募集いただけませんかというものは、お預かりしたまま連絡をしないことが多々あります。学生を守るという言い方もできますが、学生たちの学びになっているかどうかポイントになります。敬愛大学では、地域連携センターがボランティアセンター機能を果たしていますが、この中には、災害系のボランティア、つまり台風や震災の短期のボランティア、子どもたちの学びに関する教育のボランティア、まちづくりに関するボランティアもあります。大学を横断的に緑化の活動に取り組んでいるボランティアもあります。先ほどボランティアは voluntas から始まった能書きと言いました。能書きをもっとシンプルにしたとき、ボランティアはこうではないといけません。できる人、それからできるとき、できる範囲のことをするのがボランティアです。

敬愛大学を例にしてお話しますと、ボランティア初心者に対しては「この指とまれ」方式です。「まずは一緒にやろう、藤森も行くから一緒にやろう」であれば、不安は少ないでしょうと声を掛けていきます。もちろん、中には自立活動方式というサークル活動や有志で自分たちだけでやってみますというものもあります。「この指とまれ」で活動した人たちが、今度は自分たちでやってみますと成長してくれることもあります。これはまさに学生が化けると言いますか、達成感を持って次のステップに進んでくれたことになるとは思いません。

本学の学生は、ボランティア活動で何を学んだかを得意な SNS で間接的な語り部をしてくれます。自らの見聞や経験を家族や友達、周囲に発信してくれます。留学生がいれば多言語化されます。風聞に頼らないで自分の言葉で伝えてくれ



ます。震災の復興ボランティアに関わった学生の中には、ライフラインが大事だと気が付いて、プロパンガスの会社に就職した者もいれば、防災教育の重要性を学び、小学校の教員になって防災主任を命じられた者もいます。また、報道や思い込みとの差を知ります。オリパラも震災もそうです。実体験で得られたつながりや感動で学生たちは目覚めていきます。自分の行動が誰かの力になっている実感が湧きます。「ありがとう」と言ってもらえることや自分の行動に達成感があるかとは、今の学生にとっても大事なことではないかと思います。私はボランティアセンターの機能を含めた地域連携センターという立場ではありますが、あまりそういう肩書にとらわれず、学生とボランティアを一緒にやるおじさんでいいと思っています。僕はボランティアコーディネーターというより、ボランティアおじさんという肩書でいいと思います。

最後になりますが、学生が実感した自己有用感ということで、最後のスライドの言葉をまた後ほど、お時間があれば共有させていただこうと思います。私からは以上です。ありがとうございました。

【馬場】ありがとうございます。私は結果的に藤森先生と同じ考え方でずっとやってきています。藤森先生とお会いして、いろいろな話をする中で、同じことを同じ感覚でやっているなと感じてきました。まさにボランティアおじさん仲間という感じです。残り時間が少なくなっていました。この後私から、これからについての話題提供をもう 1 つさせていただいていいでしょうか。最後にレガシー作りについて、仁平さんと峯岸さんにまたコメントいただきたいと思います。オリ・パラ期間中、国内競技役員の方で、このまま終わるのではなく何かレガシーを残したいという話をして、レガシープロジェクトを勝手に作りました。東京 2020 大会では、復興五輪というキーワードが抜けていると感じていました。あえて in CHIBA を加えています。復興五輪である東京 2020 in CHIBA のレガシーを東日本大震災被災地の方々と共に共有したいと考えています。東日本大震災が東京オリ・パラを実現させたトピックの一つでもあるからです。これだけ楽しい思いができた感謝の気持ちをぜひ被災地に届けに行きたいというコンセプトでレガシー作りができないかを話してきました。背景には、復興五輪というコンセプトが霞んでしまったことがあります。それから、コロナ禍でボランティア活動が思い切りできませんでした。私たちのレガシー、大会のレガシー、復興五輪のレガシーの 3 つで構成しています。私たちのレガシーとして、まず同窓会を開こうと考えています。ボランティアをやって大会が終わり解散してしまいました。なかなか交流できなかったのも、同窓会をしようと考えたわけですね。オリンピック開催の 2 カ月後に宮城でボランティアが同窓会を開いたという記事を見つけ、先を越されたなと思いました。今のところ 1 年後にや

りたいという話をしています。もう 1 つ、せっかく千葉で車いすフェンシングに関わったという思いがあります。体験会が手軽に開けると良いのですが、見ていただいて分かるとおりに道具が大変で手軽にはできないのです。手軽にできるスポーツをわれわれが作って普及させる、これを千葉のレガシーにできないかという発想で今、進めています。

このように試行錯誤しながら、学生と一緒に考えているところです。復興五輪として、できれば被災地に行こうと話しています。被災地に行って、われわれが作った新しいスポーツをみんなでやり、感謝の気持ちを伝えに行きたいのです。これを学生に言っても、まだピンと来ていないのですが、頑張っで説明しているところです。最後に、国立競技場にも行けていないので、行って記念撮影して一区切り付けたいと考えています。同窓会は定期継続開催で 4 年ごとに開催したいです。次はフランス、パリで会おうということができればいいのですが。同窓会をオリンピックのたびに行き、あのときこうだったと話ができるコミュニティになったり、これからボランティアをしたい若者たちと何か交流ができればいいなと思います。勝手にパイプ椅子フェンシングと名前を付けましたが、これが普及することで千葉のレガシーが残ってくれないかと考えていますので、話題提供させていただきました。時間が押していて、意見交換というほどの時間が取れません。今回、体育学会で大学関係者が多いので、仁平さんと峯岸さんはなかなかお会いする機会がないと思います。県の立場、市の立場から、特に大学関係者に向けてコメントをしたいところがあればお話いただけないかと思います。仁平さん、いかがでしょうか。

【仁平】ありがとうございます。同窓会というアイデアはとてもいいと思います。まず、行政の立場で一同に多く集めるものを仕掛けるのは、まだしにくい雰囲気があります。少し時間を置いて、何らか集まれる仕組みを私たちが考えたら面白いのではないかと思います。都市ボランティアの中にも、それぞれのテーマで小集団になって、引き続き語学を勉強するグループやイギリスのコベントリーとオンラインで文化交流を続けるグループなど、いろいろなユニットができています。それをさらに束ねていくと、スポーツボランティアからいろいろなボランティアに波及させていく意味でも面白いのではないのでしょうか。障害やパラスポーツの関係では、引き続き千葉県でも、いろいろなところで体験会をやったり、パラスポーツにこだわらず、いわゆる「ゆるスポ」のようなものを組み込んだり、子育てコミュニティなどの地域の活動と融合した形の集いだったり、そういう仕掛けも今後やっていけたらいいと個人的には考えています。ぜひ一緒にいろいろな企画ができると、大学の学生さんたちが自己有用感を感じながら、自分が生きていく道と重ね合わせて、人生の選択肢を広げていく視点を持つ機会にな

るといいと思います。スポーツボランティアからいろいろな社会の様子に目を向けていただける活動となれば、学生さんと地域コミュニティがお互いに Win-Win の接点が作れるので面白いと思います。

【馬場】ありがとうございます。峯岸さん、市の立場からはどうでしょうか。

【峯岸】色々なお話をしていただき、ありがとうございました。同窓会に関しては、本当に面白い企画であると思うのですが、正直なところ千葉県として、被災地に行き、同窓会を実施するのは難しい気がしています。しかし、チーム千葉ボランティアネットワークに入っている大会に関わった都市ボランティアや大会ボランティアの方が何かできれば良いと、私は思いました。

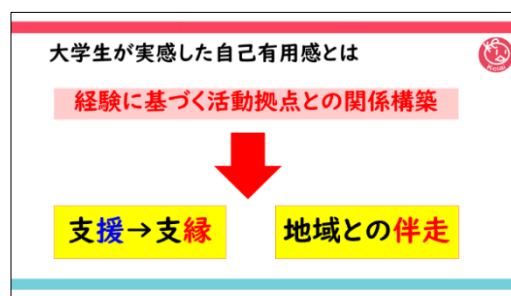
パラスポーツに関しては、皆さんご存じのとおり、千葉県はパラスポーツにすごく力を入れています。パラスポーツの大会やパラスポーツフェスタちばは、たくさん学生のボランティアの協力があり、開催しています。私が所属しているオリンピック・パラリンピック調整課は将来的にはなくなってしまう課ですが、今後も引き続き、学生さんと協力しながら、大会を開催できたらいいなと思っています。それから、独自のパイプ椅子フェンシングなどを学生だけではなく、市や県に働きかけて一緒にできたら、すごく面白いと思います。

今までパラスポーツをやっていなかった人も、パイプ椅子フェンシングからだったら始められる方もいると思います。一緒に企画して市・県共催でできれば、一般市民の方や県民の方が多く参加できると思いますので、ぜひ一緒にできればいいなと私は思いました。

【馬場】ありがとうございます。3月に市原市と大学が共催する健常者と障害者が交流するイベントを頼まれて準備しています。実は、それに間に合わせて、パイプ椅子フェンシングを実施する方向で頑張っています。実現できるかはまだ分かりません。私と遠藤先生は学会員なので、またどこかで皆さんにお話する機会があると思います。藤森先生、あまり時間はないのでスライドなしでも構わないのですが、最後に「しえん」の話題だけコメントしていただけると助かります。

【藤森】ありがとうございます。従来考えていた「しえん」は、援助する「支援」です。これから先は支える、援助するプロセスを経て、つながった縁、ゆかりが持続されること、「支縁」が大切です。都市ボランティアや大会ボランティア、あるいは学生が普段やっているボランティア、全てに言えることです。ボランティア活動で一度はお互いが協力し合って、援助し合ってできたゆかり、縁は止め

てはいけません。さらに支え合いながら深めていかなければいけないと私自身は強く考えています。この言葉をあちらこちらで大切に使うようにしています。こういう言葉を皆さんの中でももっと普及していったらいいと感じています。



【馬場】ありがとうございました。皆さんからいろいろな質問を受け付けたかったのですが、司会進行の不手際で時間がなくて申し訳ありません。最後に一言だけ私からコメントして終わりたいと思います。今回、千葉県体育学会ということで、大学を含めた関係者の方が聞いている前提でコメントさせていただきます。

今日の話で、ボランティアをしたい人や学生がたくさんいることを何となく実感していただけたと思います。大学が関わるということは、まさに中間支援組織やボランティアのコーディネイト役になり得る組織・存在・人だと思っています。ボランティアの依頼が来たから、ただ紹介するだけではなく、その間に入って何ができるかが重要です。それを組織的に作られている大学もあれば、私たちがのように個人で学生と関わる関わり方もあると思うのです。すごく可能性があると思うので、ぜひ参加されている皆さまの立場でできること、例えばボランティアに参加する、学生と一緒に活動する、大学と関わって学生を派遣するでもいいと思います。何かやっていただけるヒントになったらいいなと思います。私が心掛けていることは、学生にどんどん小さな成功体験をさせることで、大きなものにチャレンジできる学生にしたいと思っています。スポーツボランティアでしたが、スポーツで終わらせるつもりはなく、これを経験していろいろなボランティアに関わっていける人材を学生時代に育て、社会に出てくれたらなと思っています。今回のシンポジウムの内容は、文字起こしをして学会誌にうまくまとめたいと思いますので、ぜひ改めて見ていただき、今回参加できなかった方にも情報が伝わるようにさせていただきます。時間がギリギリで、次のプログラムに食い込んでしまったと思います。申し訳ありません。この辺で終わりにしたいと思います。拍手の音は届きませんが、登壇していただいた先生方、ありがとうございました。では以上で、シンポジウムを閉じさせていただきます。ありがとうございました。

・注1 : City Cast Chiba Memorial Movie 2018-2021

<https://youtu.be/1VrRdIIwoPQ>

・注2 : City Cast Chiba がおくる「ボランティア活動ニュースレター」

<https://www.pref.chiba.lg.jp/kkbunka/volunteer2020/nl/index.html>